ヤコブス・ホイエルとホメロス研究
—「フィロロギカ」の歩みとともに—　第２章

久保正彰

上記標題の「第１章」のもとに進められた探究は、主としてヤコブス・ホイエルのホメロス欄外注記の出典とその抜粋の主旨を確認することに焦点を絞って行われてきた。この基礎作業は、主として東大文学部所管の「ブリンク文庫」の蔵書をもとにしており、補完的資料をユトレヒト、ライデン、アムステルダム各大学の図書館および大英図書館の所蔵する関連書籍から得ている。この基礎的作業は 05 年 8 月の時点でほぼ完了し、これによって、ヤコブス・ホイエルの知見の範囲とその背景が判明し、かれの判断材料のほぼ全容が浮かび上がった。

しかしながら、かれが残しているのは欄外注記だけではない。かれが用いたアルド版ホメロスの行間のいたるところ約 2000 を越す箇所には、本文の誤字、誤植、脱字などを正す訂正が、極細字のペンで記入されている。これらは、かれのホメロス措辞に関する知見や判断の直接的表明である。またアルドが印刷したホメロス詩の句読点の是非や、文中や文末の疑問符の用法についても、綿密な指示や訂正を施している。問題箇所については、コンマやピリオッドの存否や位置を問い、直接疑問か間接疑問かの別を問い直している。かれの訂正や附加の記号の一つ一つは、ホメロス詩の文法構造について、かれが有した明確な理解と判断を裏づけている。そればかりか、近世人がホメロス詩を音読したときに初めて意識される古代詩人の息遣い、声の強弱・抑揚、そして時には、一連の語りの段落の切迫感までをも、文字面に織り込む手段があるとすれば、それは句読点であることをかれは伝えようとしている。

今回の報告は、欄外注記の文献学的考察ではない。句読点と疑問符の訂正記号を手がかりにして、ヤコブス・ホイエルのホメロス研究の一面を明らかにしてみたい。そのためには、どうしても幾種類かの写本や版本との比較検討が必要である。その必要性をみたす一便法として、今回検討の具体的対象を『イリアス』第 XXII 巻に求めることとする。使用する文献は以下の５種である。

1. V.A.:　Codex Venetus A Marcianus 454 の略。使用するのはその写真復刻版 (1901 ライデン刊)。ドミニコ・コンパレッティの解説が附く。原本は現存するホメロス諸写本中、随一の高い評価を受けている。10 世紀ビュザンティン帝国主都コンスタンチノポリスにおいて筆写。欠損部分は後世補筆されている。ベッサリオンがヴェネチア共和国に寄贈した蔵書コレクションに含まれていたと言われている。1488 年デメトリオス・カルコンデュレスがホメロスの初版本 (フィレンツェ刊) を編んだとき、これを参考にしたと伝えられるが、詳細不祥。復刻版に序言を附しているコンパレッティによれば、18 世紀末の Caspare D' Ansse de Villoison に至るまで、それ以前にこの写本を精密に検討した学者はいなかったと記されている (序言 xii ～ xiii 参照)。それよりも 100 年も遡る 17 世紀末、ヤコブス・ホイエルがヴェネチアの聖マルコ教会図書館を訪ねて、

この写本を検証したことを跡づける証拠はまだ発見されていない。

2. Valck.: L.C. Valcknaer (1715 ～ 1785) の略。かれの『イリアス』XXII 巻研究に含まれる本文の読みを指す (「ホメロス叙事詩第 XXII 巻『ヘクトルの最後』について」。これは『文献学、本文批判、修辞学に関する論文集』第 2 巻 15 ～ 51 頁所収、1747 年学位論文、1809 年ライプチッヒ刊。) ファルケナールは、ライデンのホメロス写本 (ギリシア語写本 64 番フォシウス旧蔵本) の本文及びその欄外余白の古注を精査した。その成果をまとめた上記の論文は、ホメロス原文と古注の伝承に関する近世最初の学術的研究として高い評価をうけている。

このライデン写本と、これを使用した 17 世紀の学者たちについては、第 3 回「フィロロギカ」研究集会 (03 年 9 月 13 日於東京都立大学) で紹介した処である。ここでは、次の 2 点のみを特記して、Valck. を参考・比較のために使う理由としたい。(a) このライデン写本に伝わる古注が、ヤコブス・ホイエルがホメロス欄外注記において、“肉筆古注” (sch. mss.) と表記し、128 箇所の抜粋を留めている原本であること。(b) ヤコブス・ホイエルが、『イリアス』第 XXII 巻の本文に記入した句読点、疑問符などに関する訂正の中、その大多数のものは、60 年後の Valck. 本文にも現れていること。しかし、Valck. のいずこにも、ヤコブス・ホイエルについての言及はない。

3. Eust.: コンスタンチノポリスの学僧 Eustathios が 12 世紀末に完成した『ホメロス注釈』の初版本 (1542-1550 ローマ刊) の頁を追って挿入されている、ホメロス叙事詩の本文。『ホメロス注釈』三巻と同書索引一巻はマヨラーヌス (N. Majoranus) とデヴァリウス (M. Devarius) の二名の編者によるものであるが、これを印刷に附するに際して、注釈文に対応するホメロス本文の該当部分を適宜に配分して刷り込んでいる。この本文部分は、アルドの第二版 (1517) に改良を加えたものと言われるが、今回の調査によってその言の正当性が確認されている。同版ホメロス本に加えられたヤコブス・ホイエルの訂正の跡と比較対照するために、本稿において、Eust. の略号を使用している。ヤコブス・ホイエルの方では、エウスタティオスの『注釈』を、『オデュッセイア』欄外余白に抜粋記入しているが、『イリアス』の場合、僅か 2 ケ所で用いているに過ぎない。

4. Ald.: マヌチオ・アルド編『ホメロス作品集』ウェネチア 1517 年刊の本文。

5. J.G.: ヤコブス・ホイエル自身による訂正、Ald. の誤字、脱字の訂正ならびに句読点、疑問符の修正や附記の指示。アルドの印刷記号と J.G. 肉筆記号との判別が困難である場合には、手元のアルド版と、アムステルダム大学蔵の同年同版本 (OK66-140) とを逐一対比照合の上、J.G. の肉筆記号と確認されたもののみを、以下に J.G. として用いている。

以上の 5 種の訂正グループの間には、ごくゆるやかな依存関係が認められるに過ぎない。例えば、V.A. は年代的に最古であり、カルコンデュレスの初版 (1488) を介して Ald. 初版 (1504)、そして Ald. 第 2 版 (1517) へと続く流れの源に位置するけれども、字句の異同、とくに句読点、疑問符の存否など細部に関しては、その間 600 年間に生じた変化は極めて大きい。同様に、Ald. (第 2 版 1517) の改良版であ

る Eust. (ホメロス本文) と、J.G. の訂正との間の相互の関連も、密接というわけではない。V.A. とは別系統のライデン写本の本文と古注については、ヤコブス・ホイエルも、かれより 60 年後のファルケナールも、共にこれを精査しているのであるけれども、両者とも同じ程度にライデン写本に依存しているかといえば、決してそうではない。そのように全てがいわば混流状態であり、その中から個々の訂正者の独自の見解を摘出することは困難である。だが混流のありさまを見究めることは不可能ではない。『イリアス』第 XXII 巻における 5 者間の読みの異同、句読点と疑問符の存否・異同の分布対照の概況を以下に列記する。

① J.G. のみが独自の読み・句読点・疑問符を提示して、他の諸本すべてがこれと異なる諸例：
J.G. > < V.A., Ald., Eust., Valck: 136, 202-204, 218, 284, 324, 326, 344, 418, 450 (アラビア数字は『イリアス』第 XXII 巻の詩行番号)

② V.A. と J.G. は合致しているが、他は全部これと異なる諸例：
V.A., J.G. > < Ald., Eust., Valck.: 143, 222

③ V.A., Ald., Eust. の合致に対して、J.G., Valck. が異なる例：
V.A., Ald., Eust. > < J.G., Valck.: 416

④ V.A., Ald., J.G. 3 者の合致に対して Eust., Valck. が異なる例：
V.A., Ald., J.G. > < Eust., Valck.: 225

⑤ V.A., J.G., Valck. 3 者の合致に対して、Ald., Eust. の両者が異なる諸例：
V.A., J.G., Valck. > < Ald., Eust.: 2, 183, 190, 236, 261, 292, 310, 381, 423

⑥ V.A., J.G., Eust., Valck. の 4 者が、Ald. と異なる証言を記し、その誤りを指摘している諸例：
V.A., J.G., Eust., Valck. > < Ald.: 23, 43, 49, 57, 59, 60, 71, 108, 111, 123, 144, 178, 201, 206, 209, 234, 280, 285, 295, 296, 325, 332, 334, 363, 374, 402, 409, 446, 458, 488, 495, 499, 502, 504

⑦ V.A., Eust., Valck. の 3 者の合致に対して、Ald. と J.G. の 2 者が異なる例：
V.A., Eust., Valck., > < Ald., J.G.: 247

⑧ Eust., J.G., Valck. の 3 者一致に対して、V.A., Ald. の 2 者が異なる諸例：
Eust., J.G., Valck. > < V.A., Ald.: 122, 385

⑨ V.A. の 1 者に対して、Ald., Eust., J.G., Valck. の 4 者が異なる例：
V.A. > < Ald., Eust., J.G., Valck.: 180

5 者間の証言の錯綜は以上の如くである。次にヤコブス・ホイエルが底本として用いている Ald. を中心に、細部の具体的事例を検討する。上記の諸例の中、⑥は、Ald. の誤植、誤記に対して、他の諸本が一致して正しい読み方を示している例であるが、その細部は下記の通りである (下線は違いを見分け易くする為の補助)。

23　τι ταινόμενος Ald.: τιταινόμενος cet.
43　κείμενον ἦ κε μοι Ald.: κείμενον, ἦ κε μοι cet.
49　μετὰ στρατῷ ἦ τ' ἂν Ald.: μετὰ στρατῷ, ἦ τ' ἂν cet.
57　Τρῶας καὶ Τρωας Ald.: Τρῶας καὶ Τρωὰς cet.
59　με τὸν δύστ νον Ald.: με τὸν δύστηνον cet.

60 ἐπὶ γήραος οὐδῶ· Ald.: ἐπὶ γήραος οὐδῶ cet.
71 ἐν προθύρησιν νέῳ δὲ Ald.: ἐν προθύρησι, νέῳ δὲ cet.
108 πολυκέρδιον εἴη Ald.: πολὺ κέρδιον εἴη cet.
111 ἀσπίδα καταθείωμαι Ald.: ἀσπίδα μὲν καταθείομαι cet.
123 ἵκωμαι ἰων Ald.: ἵκωμαι ἰὼν cet.
144 ὑπὸ Τρώων Ald.: ὑπὸ Τρώων, cet.
178 κελενεφὲς Ald.: κελαινεφὲς cet.
201 μάρψαι ποσὶν οὐδ' Ald.: μάρψαι ποσὶν, οὐδ' cet.
206 οὐδ' εἴα Ald.: οὐδ' ἔα cet.
209 ἐτίτανε τάλαντα Ald.: ἐτίταινε τάλαντα cet.
234 ἡ δὲ Ald.: ἠδὲ cet.
280 τὸν ἐμὸν μόρον Ald.: τὸν ἐμὸν μόρον, cet.
285 θεός Ald.: θεός· cet.
295 ἤ τεε Ald.: ἤτεε cet.
296 φρεσὶ Ald.: φρεσὶ, cet.
325 λευκανίης Ald.: λαυκανίης cet.
332 ἔσσεσθ' Ald.: ἔσσεσθ', cet.
334 γλαφυρῆσιν, Ald.: γλαφυρῆσιν cet.
363 γοόσα Ald.: γοόωσα cet.
374 ὅ τε Ald.: ὅτε cet.
402 πίπναντο Ald.: πίλναντο vel πίτναντο cet.
409 οἰμογῇ Ald.: οἰμωγῇ cet.
446 Ἀχιλλῆος· δάμασεν Ald.: Ἀχιλλῆος δάμασεν cet.
458 μένεανδρῶν Ald.: μέν' ἀνδρῶν cet.
488 κήδ' ὀπίσσω Ald.: κήδε' ὀπίσσω cet.
495 ἐδίηνε Ald.: ἐδίην' cet.
499 δακρηόεις Ald.: δακρυόεις cet.
502 παῦσαι τό τε Ald.: παύσαιτό τε cet.
504 μαλακῇ Ald.: μαλακῇ, cet.

以上の諸例は、Ald. の誤植、誤記の指摘であるがいずれも容易に訂正可能なものばかりであり、ホメロスの措辞・語法について一通りの知識を有するものならば正すのは簡単である。したがってこれらの諸例に関しては、Ald. 以外の四種の証言一致をもたらした依存関係を追跡することは行わない。

次に上記⑤の諸例を取り上げる。これらは Ald. とその改良版である Eust.(ホメロス本文) (1549) の両者に共通する読みと句読点に対して、J.G. と Valck. が一致して訂正の跡を留めている例である。またこれらの諸例においては、J.G. と Valck. の共通例は、古く V.A. の読み・句読点とも一致しているが、J.G. と Valck. がこれらの修正に際して、V.A. を実地検証したことを裏附ける証拠は、現在のところ見附かっていない (下線は違いの見分けの為の補助)。

2 ἰδρῷ Ald., Eust. > < ἰδρῶ J.G., Valck.
183 τριπτ-, τριττογένεια Ald., Eust. > < τριτογένεια J.G., Valck.

190 εὐνῆς διά Ald., Eust. > < εὐνῆς, διά J.G., Valck.

236 εἵνεκ' ἐπεὶ Ald., Eust. > < εἵνεκ', ἐπεὶ J.G., Valck.

261 μή μοι ἄλαστε Ald., Eust. > < μή μοι, ἄλαστε J.G., Valck.

292 ὅπτι Ald., Eust. > < ὅττι J.G., Valck.

310 ἀμαλὴν Ald., Eust. > < ἀμαλὴν J.G., Valck.

381 εἰ δ' ἄγε_τ' Ald., Eust. > < εἰ δ' ἄγετ' J.G., Valck.

183, 292, 310, 381 の諸例の訂正はほとんど自明であり特記に値しない。2 は文法と律格にもとずく訂正であり、正確な知見の理由附けがある。190, 236, 261 は、文法というよりも、むしろ音読に際しての声調、抑揚に配慮してのコンマの附記であろう。

Ald. の訂正に焦点を合わせながらも、ヤコブス・ホイエルの眼は万能ではなく、又かれの集中力も稀に途絶えているときがある。

162 ἀεθλοφόρι Ald., J.G. > < ἀεθλοφόροι V.A., Eust., Valck.

253 ἀλοίμην Ald., J.G. > < ἀλοίην V.A., Eust., Valck.

255 ἁρμωνιάων Ald., J.G. > < ἁρμονιάων V.A., Eust., Valck.

257 καμμωνίην Ald., J.G. > < καμμονίην V.A., Eust., Valck.

以上の 4 例の誤植は全く自明のものばかりであるが、J.G. はこれらを完全に見落としている。

次に V.A., Ald., J.G. の 3 者に共通の誤りとして、以下の一例がある。

225 στῆ δ' ἄρ', ἐπὶ μελίης χαλκογλώχινος ἐρισθείς·

V.A., Ald., J.G. は ἐρισθείς·, Eust. はこれを改めて ἐρεισθείς とし、Valck. もこれに従っている。この場合 J.G. は誤植とは見做さず、動詞現在形 ἐρίζομαι に由来するアオリスト分詞と解したのではないかと思われる。なおここで J.G. は ἐπί の ί が長母音と見なされるべきことを示すために Iota s.s. を附記している。

次に、Ald., Eust., Valck. 3 者においては句読点 (コンマ) が打たれていない箇所で、V.A. と J.G. に於いてのみそれが打たれている 2 例を挙げる。

143 ὡς ἄρ' ὅ γ' ἐκμεμάως, ἰθὺς πέτετο. τρέσε δ' Ἕκτωρ

222 ἀλλὰ σὺ μὲν νῦν στῆθι, καὶ ἄμπνυε, τόνδε δ' ἐγώ τοι

ἐκμεμάως, と στῆθι, の各々のコンマは V.A. と J.G. のみに共通で他の 3 者にはない。文法的にはフレーズの切れ目をマークする為、音読者には声調、とくに息の切れ目として注目すべき点を明示している。V.A. を J.G. が現場で検証したという証拠はない。

最後に、V.A., Ald., Eust. の 3 者に於いては記入されていないコンマ (,) が、J.G. と Valck. に於いて記入されている例としては、次の一例のみである。ἐάσατε, がそれである。

416 σχέσθε φίλοι, καί μ' οἷον ἐάσατε, κηδόμενοί περ,

文法上と言うよりも、音読者の声調の変化点を指示する為であったのかと思われる。ここにコンマを入れた Valck. が J.G. に倣ってそうしたのかどうかは、不明である。

疑問符 (;) が何時頃どのように使われるようになったのか、現在の調査段階に於いては不明である。トラキアのディオニュシオス、ないしはこれに詳細な注記を附したニカノールなどが、“疑問文” のカテゴリーを確立した後であろうと思われる。

ともあれ、10世紀筆写のV.A.の『イリアス』では、疑問符は見当たらず、当時はまだ古典作品の写本伝承の中では使用されることはすくなかったのではないかと思われる。そしてAld. (1517)においても、まだその使用は限られている。疑問文であっても、その文末には疑問符ではなく、コンマやピリオッドが打たれている場合が多い。同じアルドの刊本でも、ホメロス本は、ラテン語古典作品(例えば、オウィディウス『恋愛詩集』(1502) この場合、疑問符は ?)、あるいはギリシア語の場合でも演劇作品(例えば、ソフォクレス『アイアス』(1502) 疑問符は ;)の諸例とは、明らかに異なる趣を呈している。叙事詩は“物語り”であって、“対話”を主体とする他の文芸形式とはことなる、という諒解にもとずく慣行があったのではないかと思われる。

ともあれ、Ald.の改良版であるEust.になると疑問符の用例はやや増加し、そしてJ.G.に至るや、疑問符を附記することはかなり自由になっている。下記の箇所では、V.A., Ald.ともに行末に疑問符は打たれていないが、Eust., J.G., Valck.では3者とも、行末に疑問符(;)が記入されている。

122 (= 385) ἀλλὰ τίη μοι ταῦτα φίλος διελέξατο θυμός;

他方次の場合には、V.A.以外の諸本は全て、疑問符を行末に記している。

180 ἄψ, ἐθέλεις θανάτοιο δυσηχέος ἐξαναλῦσαι;

ヤコブス・ホイエルが『イリアス』第22巻の、詩行行間に附記した各種の訂正指示は、総数70箇余を数える。その中で、J.G.独自の知見と判断によって記入したものを確定するのは難しいのであるが、V.A., Ald., Eust.の3者の読み、句読点とは異なる指示を残している例は次の如きである。

(a) 136 Ἕκτορα δ' ὥς ἐνόησεν ἕλε τρόμος· οὐδ' ἄρ' ἔτ' ἔτλη

V.A., Ald., Eust.の3者はみな以上のように句読点を附している。これでは ἐνόησεν の主語がアキレウスであるかの如き印象を一瞬与えるかも知れない。この一行に交錯するヘクトルの知覚と恐怖を際立たせる為に、J.G.は次のようにコンマ(,)を2度これに加える。

136 Ἕκτορα δ', ὥς ἐνόησεν, ἕλε τρόμος· οὐδ' ἄρ' ἔτ' ἔτλη

一行の音読に4度の声調の変化が緊迫感を高めることとなる。Valck.は(O.C.T.も)これに従っている。

(b) 202-4 πῶς δέ κεν Ἕκτωρ κῆρας ὑπεξέφυγεν θανάτοιο,
εἰ μή οἱ πύματόν τε καὶ ὕστατον ἤντετ' Ἀπόλλων‹›
ἐγγύθεν, ὅς οἱ ἐπῶρσε μένος λαιψηρά τε γοῦνα·

上記はV.A., Ald., Eust.が3者各々の本文に記している本文と句読点である。‹›は、Ἀπόλλων の後にはいかなる記号も附記されていないことを、便宜的に示している。Valck.もまた、上記3者と、読み、句読点ともに同一である。どこにも疑問符をつけていない。これらに対して、J.G.はかなり大胆なマーキングを施している。202-203は他の4者と同じままであるが、204は、

204 ἐγγύθεν; ὅς οἱ ἐπῶρσε μένος λαιψηρά τε γοῦνα;

一行の中に2度、疑問符を記入している。

202 πῶς ではじまる、3詩行にまたがる長い文章は、疑問(202)、そして驚くべき事態をもたらした条件(203)、さらにその具体的結果(204)と、文意を展開して

いく。構文上の展開と同時に深まる話者アキレウスの驚きと意外の念を、J.G. は ἐγγύθεν の後と、行末 γοῦνα の後に疑問符を記すことによって、視覚的にも明示し、強調しようと試みたのであろう。ちなみに 300 年後の O.C.T. は、204 行行末の γοῦνα; を採用しているが、ἐγγύθεν の後には疑問符を打っていない。O.C.T. は 202-204 を一連の平板な疑問文と見做したのであろう。

(c) 218 Ἕκτορα δηιώσαντε μάχης ἆτόν περ ἐόντα·

V.A., Ald., Eust. は上記の句読点を保持し、Valck. もこれに従う。ただ J.G. のみは δηιώσαντε の後にコンマ (,) を打ち、caesura を強調している。

(d) J.G. の訂正指示の意図は、殆ど全ての場合、簡単に理解できる。しかし『イリアス』第 22 巻中の次の 2 例の場合は例外である。

284 ἀλλ' ἰθὺς μεμαῶτι διὰ στήθεσφιν ἔλασσον· / εἴ τοι ἔδωκε θεός·

諸本は 284 行末の ἔλασσον の後に (·) を打つ、あるいは、(,) を記している。文章は 284 では完結しておらず、285 に後置された条件文の終わりをまって完結される。284 で終わっているのは前置 (倒置) された帰結文であるから、その後には何らかの句読点 (,) あるいは (·) があって然るべきであろう。諸本はその考えに従っていると解される。ところが J.G. は Ald. の当該の箇所に刷られていた (·) を消去するように指示している (✗)。その意図はにわかに解し難い。全く同様の難点が 344 にも認められる。

344 τὸν δ' ἄρ' ὑπόδρα ἰδὼν προσέφη πόδας ὠκὺς Ἀχιλλεύς·

この定形句的表現の後には (·) あるいは (,) を打つのが諸本の例であり、これは今日に至るまで変らない。ところが何故か J.G. は、Ald. に印刷されている (·) を除去するように指示している (✗)。この訂正は誤りであり、必要は無かったと目される。

(e) 324 φαίνετο δ' ἦ κληῖδες ἀπ' ὤμων, αὐχέν' ἔχουσι ‹› V.A.

φαίνετο δ' ἦ κληῖδες ἀπ' ὤμων αὐχέν' ἔχουσι, Ald., Eust., Valck. (O.C.T.)

J.G. は φαίνετο δ', ἦ κληῖδες ἀπ' ὤμων κτλ. と句読点を打ち、“鎖骨が両肩から首をわけているあたりの”、その咽喉の部分があらわになったことを示す。φαίνετο δ', のコンマ (,) は、次行 325 行初の λαυκανίης を部分属格と解するべきことを一層容易ならしめる為に附記されたと思われる。

(f) 326 τῇ ῥ' ἐπὶ οἷ. μεμαῶτ' ἔλασ' ἔγχει δῖος Ἀχιλλεύς· V.A.

τῇ ῥ' ἐπὶ οἱ μεμαὼς ἔλασ' ἔγχει δῖος Ἀχιλλεύς Ald., Eust., Valck.

ἐπὶ οἷ の後に (.) を附している V.A. の意図は不明。現代版 (O.C.T.) は、οἷ. の (.) を除いた読み方によって、両雄が挑みあい、槍が交錯するさまをよく明らかにしている。J.G. もそのようにこの文脈を解したのであろう、τῇ ῥ', と ῥ' の後にコンマを附し、οἱ を reflexive (> Achilleus) (= οἷ) と解したものと思われる。J.G. のこのようなコンマ (,) の使用例は、上記 (a) 136 や (e) 324 に於いても類似のものが見い出される。もしヤコブス・ホイエルが V.A. を実地に検証していたならば、μεμαὼς (Ald., Eust., Valck.) ではなく、μεμαῶτ' (V.A.) の方が、かれの解釈に適合することを見てとり、-ὼς を -ῶτ' に改めていたに違いない。

(g) 375 ὡς ἄρα τις εἴπεσκε καὶ οὐτήσασκε παραστάς

この詩行について読みや句読点、疑問符の是非に関する指示はないが、詩行全体を指して “ἀθετεῖται Sch. mss.” というヤコブス・ホイエルの附記が欄外に残っている。

この古注は、Allen も O.C.T. の apparatus criticus に於いて指摘しているように、ライデン写本に附記された肉筆古注以外には何処にも伝わっていない特殊なものであり、これがヤコブス・ホイエルが“肉筆古注”として引用している文献を同定確認する重要な手がかりとなっている。375 行に対してこの古注を附したのは 13 世紀のコンスタンチノポリスの「セナケリム」と称する学僧である。かれについては、G. Krumbacher, *Geschichte d. Byzantin. Literatur,* Vol. 1., p.478 および p.541 に詳しいが、ヤコブス・ホイエルやまたその 60 年後これを精査したファルケナールの時代にはまだ全く何処の誰とも判らぬ人物であった。ともあれホイエルもファルケナールも、ここに附記された古注に深い感銘を受けたことは確かである。375 行目は、倒れたヘクトールの屍に対して、ギリシア側の誰も彼もが、嘲りの言葉をあびせ、これを槍の穂先で傷つけるさまを語る。古注の記者セナケリムは、これほど無残に、ホメロス詩の称揚する人間の気高さを破壊し去っている描写は、除去されて然るべしと、断じている。かれの言葉使いから察するところ、ロンギーノスの『崇高論』にも通じていた大学者であったらしい。ヤコブス・ホイエルは極く簡単に ‘ath.’ (除去) と記しているだけであるが、ファルケナールは詳しく、その古注全文に対するかれ自身の評釈を加え、‘セナケリム’ の探索に情熱を燃やしている。(『ライデン写本及び未刊行ホメロス古注に関する論』(『論文集』ライプチッヒ刊、第 2 巻、xix. pp. 134-138 参照))。しかし苛烈な戦場描写のリアリズムにこそホメロス叙事詩の偉大さがあると見るのか、現代の校訂家たちは 375 行を除去しようとはしていない。

(h) 402 κυάνεαι πίπναντο· κάρη δ' ἅπαν ἐν κονίῃσι

上記は Ald. の本文である。その πίπναντο と印刷された文字の上に πίλναντο という語が、また左側の欄外余白には πίμπλαντο という語が J.G. によって書き添えられている。πίλναντο は V.A. 及び、Eust. が注釈内で、異読として伝えている処であり、またライデン写本の読みでもある。他方 πίμπλαντο は、幾つかの系統の写本群の伝える読みであるが、J.G. の根拠は恐らく、ハリカリナッソスのディオニュシウスの『文体論』18a が引用しているホメロス本文であったろう。J.G. は欄外余白にレオパルドゥスの『本文修復論』*Emendationes* (1568 年アントワープ刊) 巻 2. 11 節から、次のような長文の引用を附記している。“「毛髪讃美」におけるシュネーシオスの言によれば、プルーサのディオ (クリュソストモス) はヘクトールの毛髪について語るホメロスの詩句を ἀμφὶ δὲ χαῖται κυάνεαι πεφόρηντο として引用しているとし、だがこのような詩行をホメロス叙事詩の中で発見することはできないとシュネーシウスは言っている、” とラテン語で記しその後にシュネーシウスの原文をギリシア語で引用している。即ち、“ヘクトールについてのホメロスの言葉とされている (シュネーシオスは言うのだが— J.G. ラテン語注) ἀμφὶ δὲ χαῖται κυάνεαι πεφόρηντο であるが、—それがホメロスの吟唱詩 (rhapsodiae) のどこにあるのか、知っている人がいれば教えて貰いたい。いやあの高名な吟遊詩人のイオンだとて、これを見附けることはあるまいと思う。” 下線を附したギリシア語引用文に続いて、J.G. は次を附記する (ラテン語)、“しかしかれがどうして誤りをおかしたのか、それについては Leopardus の *Emendat.* 2 巻 11 節を見よ。”

J.G. の指示に従って、開いてみると (アムステルダム大学図書館蔵、登録番号 1737D.4)、シュネーシオスがギリシア語で引用しているホメロスの一行に、

Circum autem crines caerulei ferebantur というラテン語訳が附されているという一点を除外すれば、そこまでのレオパルドゥスの説明は J.G. によって殆ど字句通りに引用されている。

レオパルドゥスは更に続けて自分の見解を述べる、“しかし何故かれが、『イリアス』第 22 巻の一句を記憶していなかったのか合点がいかない。つまり、ἀμφὶ δὲ χαῖται κυάνεαι πίμπλαντο であるが、(そこで πίμπλαντο の代りに) ディオが、πεφόρηντο といっているとしても、その意味が外れているわけではない。吟遊詩人イオンというのはホメロス全詩作を諳んじていたという人物で、その名にちなむプラトン作の対話篇がある。ついでながら、οὗ という語についてのスイダスの記事には誤りがある。また、そこに引用されている文では、ἐξευρήσειν (未来時称不定法) の代りとして ἐξευρεῖν (アオリスト時称不定法) が読みとして採用されている、”と。

つまりレオパルドゥスの指摘は、“シュネーシオスはディオが引用している句はホメロスの中には存在しないとは言うが、一部分違いで同じ意味の句がある”ということである。つまり、異読 (lectio varia) の介在を知る人であればシュネーシオスの言分は当らないことが判る。J.G. はその点だけを重視したと思われる。しかし、J.G. の欄外や行間の注記を見る限り、そこに記されている πίλναντο, πίμπλαντο, πεφόρηντο の 3 種の異読の中のどれを正読として、第 402 詩行において採用するべきであるか、その点についての指示を見出すことはできない。

3 種の読みの中、先行 2 者のいずれかを伝える写本の系統が複数あることは、今日知悉の通りであるか、第 3 の読み方はシュネーシオスの中でしか知られていない。J.G. より 60 年後、ファルケナールも J.G. と同じようにレオパルドゥスの見解に大層興味を抱き、とくにシュネーシオスが伝えている (ディオの引用とされている) πεφόρηντο という語をもとに想を廻らし、ここは自分の考えとしては πεφόρυντο と読むのが正しいと注記の中で言っている。(上記『論文集』p. 62)。しかし本文内での読みは、諸本 (V.A. を含む) が伝える πίλναντο (= J.G. interlin. s.s.) を採用している。

このように諸説入り混じるのを眺望した後にもう一度 Ald. の印刷面を見ると確かに πίπναντο となっていて、これは明らかに誤植である。1517 年、もしマヌーチオ・アルドがまだ存命していたならば、これを訂正したに違いないのであるが、J.G. や Valck. と同じような訂正を施したであろうか。Ald. の誤植の中では、上記 183 ‹τριπτο-› ‹τριτο› や 292 ‹ὅπτι› ‹ὅττι› にもあるように、‹π› ‹τ› の刷り違いが頻繁に認められる。402 も、πίπναντο は πίτναντο の誤植であったのではないだろうか。πίτναντο はアリスタルコスの読みとして、これを伝えている写本の系統も複数知られている。ちなみに現行の O.C.T. もこれに従っている。大学者マヌーチオ・アルドの名誉のために、ヤコブス・ホイエルが施した誤植の訂正 (πίλναντο) そのものが、アルドの意図したところを捉えそこねた訂正であるという可能性を、蛇足と知りながら附記しておきたい。

(i) 418　λίσσωμ' ἀνέρα τοῦτον, ἀτάσθαλον, ὀβριμοεργὸν,

V.A. のこの読み (λίσσωμ' ἀνέρα) は大多数の写本の系統によって伝えられており、Valck. も、λίσσωμ' と読んでいる。他方 Ald. は λίσσομ' ἀνέρα と読み、Eust. (本文) もこれに従ったままの形であるが、これでは六脚詩の律格に合わない。合わせると

すれば、V.A. その他のように、o を ω に改め、λίσσωμ' と読む他はない。しかし J.G. はこの方法をとらず、Ald. λίσσομ' の右肩に小さく -μαι を附記し、ここは λίσσομ' ではなく λίσσομαι を読めばよいとと指示している。ホメロスの詩法では、ἀνήρ の対格形の ἀνέρα において語頭の α は常に長母音と見做されることをよく知っていたのであろう。λίσσομαι の語尾の -αι は、続く長母音 α の前で律格上短母音の扱いとなり、λίσσομαι ἀνέρα (– ⏑ ⏑ – ⏑ ⏑) という準正則の形に復する。J.G. の修復案を支持するような読み方を伝えている写本の系統も複数ある。しかし 418 の J.G. の指示は、そのような写本のいずれかに従うものというよりも、ホメロスの詩法に関しての、かれ自身の知見と判断にもとずく修正提案であった可能性が高い。

(j) 450 δεῦτε δύω μοι ἔπεσθον· ἴδωμ' ὅτιν' ἔργα τέτυκται.

ここで、V.A., Ald., Eust., Valck. の 4 者はみな ὅτινα と読み、今日 O.C.T. もこの読みに従っている。今日、ホメロス叙事詩における ὅστις の複数対格形は ὅτινας (15 巻 492)、ὅτινα (第 22 巻 450) とするのが定説となっている (P. シャントレーヌ『ホメロス文法』第 I 巻 280 頁参照)。しかし 450 行では、ἄτινα という複数形を伝えている写本の系統も複数あり、J.G. も恐らくはかれ自身の判断と思われるが、Ald. の印刷面に現われている ὅτινα を ἄτινα に改めている。

以上 (a) ～ (j) までの 10 例が、J.G. が『イリアス』第 22 巻のアルドの印刷面に附した 70 箇所の訂正指示の中で、他の諸本とは共通性のない、J.G. 独自のものと推定される。これらはみなかれの判断の結果を明示している。現時点においては、かれがライデン写本 (64) 以外のホメロス写本を実地検証したことを示す証拠はない。またライデン写本にしても、かれが鋭意研究していたのはその欄外に記入された古注記事のみであって、ライデン写本の本文に対する言及 (と思しきもの) は、上記 402 の行間に附された πίλναντο の一語のみであり、これも実はライデン写本からのものではなく、Eust. 本文の流れを引くものであったかも知れない。つまり、J.G. はいずれかの写本との照合によって、本文を訂正しているのではなく、かれ自身のホメロス措辞・語法に関する知識を杖として、誤植や誤記を訂正し、自分が音読朗誦する際の声調、息使いなどを判断の頼りとして、句読点や疑問符を消したり加えたりしていったのではないか。そのように思われてならないのである。上記においては具体例として『イリアス』第 22 巻からの 70 例のみを検討の対象として提示したに過ぎないが、かれの判断のレベルの高さと、訂正や附記の質と一貫性は、両叙事詩や讃歌集の約 2000 箇所を通じて変るところなく維持されている。17 世紀後葉、ホメロス研究の黎明期を告げる、画期的な第一歩をここに認めてもよいのではないだろうか。「古代人の書物の誤写を糺し、古の輝きを復することを目標とするこの学 (ars) は、前人より学び習いしものに非ず、精根こめて己が創出したるものなり」。古典学誕生を告げるフランチェスコ・ロボルテッリのこの誇らかな宣言に、静かに耳を傾けているヤコブス・ホイエルの姿が眼前に浮かぶようである (F. Robortello, *De Arte sive Ratione corrigendi Antiquos Libros Disputatio, nunc primum a me excogitata,* この小論文はブリンク文庫のコレクションの中では、A. Schoppius, *De Arte Critica,* 1672, Amsterdam に合本された形で保存されている)。

(日本学士院)